

「ビルダーボーゲン」に見る人種・民族問題

日時 2016年6月24日（金）13：00～14：30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 宇佐美 幸彦（文学部特別契約教授）

「ビルダーボーゲン」は主に19世紀のドイツで発行された一枚刷りの印刷物で、木版や石版の画像を掲載したものである。内容は風俗画や国内外の出来事（ニュース）、外国の紹介、遊戯工作（すごろく、組み立て）、文学作品の画像化など、さまざまであるが、日本の浮世絵や瓦版に類似しているとみなすことができよう。まだ写真がなかった時代に、戦争の場面（デンマーク戦争、普仏戦争）や国事（国王の葬儀、王子の結婚式）などを画像として記録したという点で貴重な歴史的資料ともなっているが、安価で庶民の娯楽としても広い層に普及していた。

今回は、この庶民的なメディアにおいて19世紀の一般的なドイツ人の人種・民族意識がどのようなものであったかを考察する予定である。19世紀のドイツは急速に資本主義発展を遂げたが、当然のことながらそれは多くの社会的なひずみを伴うものであった。今回の報告では、(1) 当時の「反ユダヤ主義者」の見解では、資本主義発展が「ユダヤ的」な金融資本を土台としているという観点から、資本主義による搾取、貧富の格差拡大、都市への人口集中と劣悪な住環境、犯罪の増加などの諸問題が「反ユダヤ主義」と結び付けられており、そうした考え方がこのメディアにも表れている点、(2) アフリカなどに新たに植民地支配に乗り出した結果、ドイツの軍事的な侵略が民族絶滅を目指し、のちのナチスによるユダヤ人虐殺の先取りの行動を起こしており、それがビルダーボーゲンにも反映されていること、という2点について、具体的に示したい。

またこれ以外にも、世界の服装というシリーズでは外国や過去の時代の服装を図版で描いており、服装の百科事典のよう一連の作品もある。また服装以外にも人々の暮らしや社会事情を伝えようとする作品も多い。数は少ないが、日本やアジアについて報告しているものもある。ここでは19世紀後半の日本が西洋の人々にどのような姿で見られていたのかが、図で示されており、たいへん興味深い。時間が許せば、日本やアジアを描いた作品についても紹介したい。

* * *

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。
手話通訳が必要な場合は、6月9日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。

第87回 10月21日（金）13：00～14：30 「女性に対する暴力をなくすために男性に何ができるかーホワイトリボンキャンペーンの展開と課題ー」（仮題）
第88回 11月18日（金）13：00～14：30 「障害のある学生支援システムの開発物語 ～関大スタイルを求めて～」(仮題)
会場は、尚文館 1階 マルチメディアAV大教室



主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>